
傀儡師の霊界戦争

紅葉or紅蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡師の霊界戦争

【Nコード】

N7621Y

【作者名】

紅葉or紅蓮

【あらすじ】

自身の祖母、チヨと木の葉の忍であるサクラに暁であったサソリは破れ、そして死んだ。

…ある時、サソリは目を覚ます。見渡すと、そこは知らない土地であった。

「俺は死んだはず…」そう考え込む彼の目の前に、黒装束の者達が立ちふさがり…

プロローグ（前書き）

初めまして、紅葉or紅蓮です

この小説を読むにあたり、注意事項をいくつか。

まずはじめに、

- ・BL、GLを読みきた
- ・荒らしに、または晒しにきた
- ・誹謗中傷目的

上記にひとつでも当てはまる方、お帰りください（^^）

- ・NARUTO、またはBLEACHが嫌い
- ・主人公の人選ミスってる
- ・作者が嫌いである

この3つにあてはまる方も、出来ればお帰りいただきたいです…

さて、逃げましたか？

では記念すべk（ry プロローグです。

うん！

ブローグ

思わず下を見る。

『蠍^{さそり}』を書かれた自身唯一の生身である場所^{己の弱点}が、刃物で貫かれていた。

グツと重力が何倍になって襲い掛かってきたように体が重く、動かなくなる中で、少年　・サソリは首を横に、動かす。

そこにあるのは、己が求めてなかった　　両親の、顔

ガシャン。

無機質な音が響く。

動けなくなった自分が、自らの手で作った両親の傀儡^{くぐい}と共に倒れる。

サソリを倒した彼の唯一の肉親であるチヨと木の葉の忍であるサクラが何かを話しているのが聞こえたが、如何せんサソリは聞いてはいなかった。瞼が重くて、仕方なかったから。

人形なのに。睡魔なんて、襲ってくるはずがないのに

そう思ったが、眠くてどうしても良くなってしまった。

瞼をゆっくりと下ろす。

そのとき、声が聞こえた。

『待ってる。』

『いつまでも待ってる、見守ってるから』

自身が欲しくて堪らなかった、両親の優しい声が、聞こえたような気がした

『赤砂のサソリ』は、死した。

プロローグ（後書き）

最近知ったんですが、サソリさん生き返るみたいですね。

この小説にちよつと響きそうなんで、（腰痛みたいに言うな）そこらへんは無視しちゃってください。はい、ごめんなさい。しかも今回短いッスね。

まあこれから『傀儡師の霊界戦争』（略して何にしよう…）をよろしく願います！！

傀儡師と黒装束

両親の傀儡に核を刺され、体が鉛を飲んだように重くなる。

離れ行く意識の中、サソリはぽつり、と誰も気づかないくらいの小さな声で呟いた。

□

□

*

意識が、ふわりふわりと浮上する。

朝なのだろうか。麗らかな日差しが体中に当たり、ぽかぽかと暖かい。着ている暁の外套に黒を施されているから、余計に。

サソリはかすかに瞼を開き、太陽の光を眩しそうに歪める。

そして一拍置いてから、跳ねるようにがば、と起き上がった。

「俺は…？どうして…？」

（両親の…チヨバアの傀儡に刺されて、死んだはず…なのに）

呆然として自分の手を見つめる。

しかし、だんだんと時間が立つうちに、サソリの脳は冷静になり始める。

サソリの頭の中に、ひとつの答えが浮かんだ。

もしかここは、『死後の世界』というやつなのかもしれないと。

それなら少々無理があるが、成る程、合点がいく。サソリは辺りを見回した。

「森か…」

（案外普通なものだな）

見渡して見たものの見えたものは木、木、木。奥をよく見てみると木漏れ日が漏れていることがわかるが、案外深い森なのだろう。

そしてサソリが倒れていた場所は、木々が綺麗さっぱり生えていない。広場というところだろうか。

「…ずいぶんと普通なところだな…地獄はもっとひどい場所かと思ってたが」

そう、サソリはここを『地獄』だと思っていた。

サソリの所属していた『あかつき暁』は、各国の抜け忍で構成されたS級犯罪者達による小組織である。サソリも暁の幹部の一人であり、沢山の忍を殺してきた。

だから、逝く場所は『地獄』。自覚もしていたし、ましてや自分が『天国』とやらに逝くなんて事は天と地がひっくり返ってもありえないと思っている。

ここが本当に『死後の世界』ならの話だが。

サソリはもう一度自分の体を見る。そして、あることに気がついた。

さっき、目を覚ましたとき。

『麗らかな日差しが体中に当たり、ぽかぽかと暖かい。着ている暁の

外套に黒を施されているから、余計に。」

そう、思った。しかしよく考えて見ろ、自分は生身ではない。もう、人傀儡なのだから。

外套のボタンを急いで外していく。外套がパサリと落ちた。

サソリの目が見開かれる。

「な…

……生身、だと……」

驚きで一瞬固まるサソリだったが、すぐに我に返り、様々なことを確かめていく。

チャクラは使える。

そして壊れたはずのヒルコや三代目風影の傀儡が、傷ひとつない状態で出てきたことにサソリは内心ほっと息を吐いた。

その時だった。

空気の激しく切れる音。それも大量に。

サソリは怪訝そうに顔を歪め、ヒルコの中に素早く入る。

入ってすぐヒュ、という空気の切れる音が聞こえて、

目の前に、突然、黒装束を纏った彼らは現れた。

「！」

「丁寧にしろ、貴様を拘束する」

ちょうど中心に立っていた男がそう言うと、皆一斉に刀を抜く。

（刀…忍ではない？）

武器がクナイではないことにそう判断する。勿論忍の使う武器はクナイだけではないのだが。

すると、男が3人、突然サソリ^{ヒルコ}の眼前に現れた。

「ッ！」

まるで瞬間移動のように掻き消えては眼前に現れるその素早さに、サソリは驚きを隠せなかった。が、風の音と砂、草などの動きでどこに来るか把握する。

後ろ2人をヒルコの尾で叩きつけ、前の1人に毒針を仕掛ける。

「があ…ッ!？」

『フン、ざまあなえな。』

そうはき捨てると、雷光がサソリ^{ヒルコ}を襲った。

ジュッ

『!?!?』

「『破道の四、白雷』」

雷光が来た方向をたどると、そこには金髪美女と銀髪の少年がいた。金髪美女は人差し指を伸ばし、こちらに向けている。おそらく、今

の攻撃は彼女の仕業であらう。

他とは違う白い羽織をした銀髪の少年は、サソリの攻撃で倒れている男達をちらりとみて、眉間に皺を寄せた。そして地を這うような低い声で、言う。

「…テメエが、やったのか？」

『あゝア？テメエらが先に仕掛けてきたんだろ？が。倍返しにして何の意味がある？』

「…そうか」

少年はそう呟くようにその言葉を紡ぐ。瞬間、少年の姿は掻き消える。

『！？』

「『霜天に座せ』」

ドスツ、と音がして、少年の声が静かに響く。サソリ^{ヒルコ}が下を向くと、そこに少年の澄んだ翡翠色の瞳があつた。

「『氷輪丸』！！」

少年が叫ぶと、刀の刺さった傀儡の隙間から大量の水が襲う。サソリはすぐにヒルコを開き、外へ出た。

音もなく地に足を着き、顔を上げると、そこには驚いた彼らの顔。

「な…人の中から人が…」

「子供…！？」

「あの子供が……」

要するにヒルコの中から子供が出てきたことに驚いている、と。

サソリは無表情のまま戦闘体制に入る。

少年と美女はそれを見て、刀を構えなおす。サソリは、指をかすかに、動かした。

[illegible]

「何!？」

まさか先ほどの人形がまだ動くとは思わなかったのだろう。少年は驚いた声を上げ、刀をヒルコから発射された毒針に向かって一閃する。

すると、毒針は水に包まれ、瞬く間に凍りついた。

これにサソリは目を丸くしたが、やがて面白そうに目を細めた。

「へえ…面白い術もあるもんだな。そんな術、はじめて見た」

「「「!?!?!?」」」

サソリは満面の笑みを浮かべ、少年を見つめる。

あの女もそうだったが、サソリが見たこともない術を使うその体に、サソリは興味を持った。

少年は目を見開いていたが、すぐにキッとサソリをにらみつける。

「デメエは、旅禍か？それとも破面か？」
アラソカル

「…旅禍？破面？そんなものは知らねえよ」

「……ひとつ聞きたい、テメエは『生きてる』か？」

「……いや、俺の記憶が正しければ、死んだはずだ。それがなんだ？」

そういうと、少年は美女と目を見合わせる。そしてサソリに顔を向け、刀を下ろした。その顔に、先ほどのような警戒は消えていた。
すこしはしているものの

それにサソリは怪訝な顔をする。

「……何のつもり？」

「お前に聞きたいことがいくつかある。ついてきてほしい」

「……」

黙っているサソリを肯定と察したのか、少年は羽織を翻し、「ついで来い」と言った。美女は怪我を負った仲間（部下だろうか）を運ばせている。そしてサソリに近づき、

「ごめんね、勘違いっぱいわ！」

急にそう言った。突然のことに驚いたサソリは硬直する。

硬直したサソリを面白そうに眺めながら美女は思った。

（コイツの声…どこかで聞いたことある気がするのよね）

こうして、傀儡師と彼ら　　死神は出会った。

いつまで経っても来ないサソリと美女に、少年が「早く来い!!」と怒鳴り散らしたのは余談である。

傀儡師と黒装束（後書き）

スランプ中です。そしてサソリの口調があまりわからんという事実。
（ちょ

少年と美女…わかりますよね。最初はどうしてもこの二人が動かし
やすい。

これからも『傀儡師の霊界戦争』を応援よろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7621y/>

傀儡師の霊界戦争

2011年11月24日19時50分発行